

魚屋さん

中国新聞朝刊「ぶらり」欄に、あるとき、私が昔三〇余年間住んでいた町がとりあげられ、その町を誇りにして、生き生きと暮らしている一人として、某鮮魚店の主（あるじ）が紹介されていた。

そうだ、あの頃は、野菜や豆腐は八百屋さんで、魚は魚屋で、肉は精肉屋さんで、果物は果物屋さんで買っていたんだ。今ではスーパーでみな揃う。しかも、魚は切り身でパックに入れて売られている。あの魚屋さんには、いつも生きのいい魚が並んでいた。

ふと、いつかラジオで、ある詩人が紹介していた、小学生の詩を思い出した。

さかなは
目をあけて
死んでいる
食べられるのを
見ようと
してるんだね

魚屋さんに並んでいる魚を見て、どれもこれもおいしそうなの、今晚のおかずの材料が並んでいる、と思いきや、魚が「死んでいる」と思ったことはなかった。

その子は、小鳥やペットや祖父母の死に遭遇したことがあったのか、それとも漫画やテレビで見た経験からか、死んだいきものは、みんな目を閉じていると思っていた。ところが、魚は生きていたときそのままの目をして、僕の方をじっと見ているではないか、とそこに新鮮な驚きを感じたのであろう。

金子みすずは、まさるとも劣らない迫力で人を打つものがある。

放送大学客員教授原野昇＝東広島市

「中国新聞」夕刊「でるた」欄

2006年5月